ヨハネによる福音書 20 章 24－29 節

「見えない不思議な働き」

讃美歌 21 の 197 番は、今日の聖書を歌ったものです。12弟子の一人であるトマスは、しばしば懐疑主義者と呼ばれます。しかし彼のこれまでの言葉を振り返ってみますと、ただ正直な人であったと思います。

イエス・キリストが復活された日の夕方、最初に弟子たちの前に姿を現された時、このトマスはいませんでした。弟子たちは興奮して、「主を見た」と口々に話していたのです。その時、トマスはどういう気持ちであったでしょうか。きっと一人取り残されたような気持ちであったことでしょう。彼の寂しさ、侘しさ、会えない後悔などの気持ちが重なり、「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」（25節）と言ったのでしょう。

1週間後の日曜日、弟子たちは、トマスも一緒に同じ場所に同じように集まっていました。そこへイエス・キリストは、1週間前と同じように、現れてくださいました。そして弟子たちの真ん中に立って、「あなたがたに平和があるように」（26節）と挨拶されました。そして、トマスに「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい」（27節）と言われるのです。イエス・キリストはトマスの気持ちをよくご存知で、トマスのためにわざわざ来てくださったのです。イエス・キリストは「信じられない」という者のために、その十字架の痛みと苦しみを広げて見せ、何度でもそれを繰り返してくださる。その痛みが分かった時、トマスはとても触ることができなかったのでしょう。イエス・キリストはトマスの求めに対して、それを超える誠実さ、愛情を示してくださった。それが分かった時、トマスは、イエス・キリストに触れる必要がありませんでした。イエス・キリストの愛の大きさに触れた時に、彼は「わたしの主、わたしの神よ」（28節）という信仰告白に導かれるのです。

イエス・キリストは、トマスの求めを受けとめつつ、それを超える大きな愛でもって、トマスを変えられたのです。そしてイエス・キリストは、「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」（29節）と結んでおられます。確かにトマスが信じたのは、見たことをきっかけにしていますが、イエス・キリストの見えない力に信頼したからではないでしょうか。ヨハネ福音書は、トマスの「わたしの主、わたしの神よ」という信仰告白こそ、一番伝えたかったことなのでしょう。トマスと同じように、信じるか信じないか、その間をさ迷っている私たちに対しても、イエス・キリストは向こうからまっすぐに近寄って来てくださり、「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と、声をかけてくださるのです。「わたしの主、わたしの神よ」という信仰告白の言葉をかみしめながら、私たちも共に進んでいきましょう。